

フランス造園の近代化

Study on the Modernization of the Landscape Architecture in France

佐々木邦博* *Kunihiro SASAKI*

1. 序、および研究の目的

名誉ある日本造園学会賞をいただいたこの論文はフランスの造園の歴史を研究の対象としたものである。フランスの造園に関してはヴェルサイユ庭園などの大小の庭園、また緑陰豊かなパリの都市公園など、名高い庭園や公園が数多くあることで知られている。

私がフランスの造園に関心を抱いたのは19年前にフランスに滞在していた時のことである。当時フランス語を学んでいたのだが、ある日ヴェルサイユ庭園を訪れてみた。初めて見るフランス式庭園にびっくりしてしまい、「すごいものだな」と感じたのがきっかけである。この時に味わった感覚は未だに忘れられずにいるが、特に訪れた直後の数日はそればかり考えていた。その結果、私が感じた一種の衝撃は美しさや大きさなどによるばかりでなく、違和感が働いていることに気づいたのである。それ以来ずっとこの点が気にかかっており、研究の対象にフランスの造園史を取り上げるにいたった。現在におけるその成果がこの論文である。

フランスの造園の歴史を概観するなら、ある特徴に気がつく。それは緩やかに変化する、あるいは変化が少ない状態と大きな変革とが繰り返すダイナミックな動きである。大規模な変革は過去2回あった。最初はヴェルサイユ庭園に代表されるフランス式庭園が成立した時期である17世紀後半であり、第二の変革はパリの都市改造において緑地計画が実行された時期である19世紀後半である。これらの変革における興味深い点は、2度とも自ら生み出していること、そしてそれらは世界中に広がる普遍性を持ちえたこと、さらにそれらは世界的な範疇においても時代を画するものであったことである。しかもパリでは近年新しい公園が次々と造られ、21世紀を指向している。これらのことを考えると、造園史を世界的な範疇で把握しようとする場合に、フランスでの動きが一つの核となり重要な位置を占めることは間違いないだろう。

そこでこの論文の目的はまずフランスの造園の二つの変革、あるいは転換点と呼んでもいいのだが、それらの内容と特徴を探り、明らかにすることにある。また一方でこれの変革には共通する指向性があるのではないかと考えられる。この点について考察を進め、明らかにしていくことを第二の目的とする。

2. 論文の構成

本論文の構成は大きく4章に分かれる。まず論文の目的、そして17世紀の変革、次に19世紀の変革、最後に二つの変革を比較し考察していく総括である。

第1章では本論文の目的を説明した。

第2章の17世紀の変革についてはまず第一節で庭師アンドレ・ル・ノートルを取り上げた。次に第2節ではヴェルサイユ庭園の建設過程を追い、庭園の改変と理念の変化を扱った。第3節ではヴェルサイユの宮殿や都市と庭園の関係をそれぞれの建設過程から探った。そして第4節では17世紀の変革の持つ意味を考察した。

第3章の19世紀の変革については第1節でパリの都市改造計画における緑地計画とその理念を扱った。次に第2節では緑地計画の責任者であるアドルフ・アルファンと彼の造園史観を分析した。第3節ではアルファンにより提示された近代的な庭園の分析を行った。そして第4節では19世紀の変革の持つ意味を探った。

最後の第4章ではこの二つの変革を比較し、それらの根底で共通しているものを考察していった。

以上が本論文の構成である。

3. 論文の概要

(1) 17世紀の変革

17世紀後半に起きた変革の特徴の一つは、それがたった一人の造園家、アンドレ・ル・ノートル (André Le Nostre, 1613-1700) によりもたらされたことにある。ま

*昭和29年9月宮城県生まれ、昭和54年3月京都大学文学部卒業、昭和60年京都大学大学院農学研究所博士後期課程退学、平成4年農学博士(京都大学)、現在信州大学農学部助教授

たもう一つの特徴に、彼が創造した様式であるフランス式庭園にはヴェルサイユ庭園 (Parc et Jardins de Versailles) というまぎれもない代表作が存在することである。ゆえにまずこの庭園の特徴と建設過程を明らかにする。

図-1は18世紀初頭、庭園建設を命じたルイ14世 (Louis XIV, 在位1661-1715) が亡くなる前のヴェルサイユ庭園の図面である。主な特徴は4点あるが、第一の点は見てすぐにわかるように比類のない広大さにある。宮殿周辺の格子状に園路が広がるジャルダン (jardin) と呼ばれる区域は94ha、さらにジャルダンの外側に広がり十字形の水路があるプティ・パルク (petit parc) と呼ばれる区域は1740haに達し、この図の中央から上の大部分を占めている。さらにこの図の外側にはグラン・パルク (grand parc) と呼ばれる狩猟林があり、6620haもの広さがあった。次に庭園の構成だが、この広大な空間をうまく取り込んでいる。宮殿の前で直交する東西と南北の2本の軸線は庭園全体を支配し、各々を対称軸とした幾何学的構成を形づくっている点の特徴的である。特に東西に延びる軸線は幅広く、森を貫き地平線を見渡すヴェスタとなっている。三番目の点だが、さらに全体を俯瞰すれば宮殿付近のデザインは緻密で細かく、宮殿を離れるに従って園路の間隔が大きくなり、空間構成が大きくなるという密度の差が見られることが上げられる。この差は宮殿に向かっては凝縮する感覚、反対方向へは無限の感覚を与えている。この密度の差は2本の軸線と相まって宮殿に中心性を持たせる小世界を形成しているのである。そして最後に個々の装飾物、それを含む空間はすべてにわたり巨大であり、人間を相対的に矮小化させる点が上げられる。すなわちヒューマン・スケールをはるかに超越した世界を構成している。これらのことからこの巨大な庭園は王権神授説に基づく王の権力を具現化した世界と言えるのである。

この広大な対称性の強い幾何学的な空間は当時の貴族にとって全くと異質な空間であった。この空間構成の持つ意味を考えるなら、結論的にいうと、この幾何学的構成こそが神の世界の表現と考えられたのである。

次にこの庭園の建設過程だが、その特徴は王であるルイ14世が死ぬまで手を加え続けた点にある。建設作業と改変作業が間断なく続行されていた。そこで作業の特徴により時期を区分して考察していくと、第1期 (1661-67) は広大な庭園の地割りを確定する時期、第2期 (1667-84) は森の中の小庭園であるボスケを中心に装飾が施される時期、第3期 (1684-98) は庭園全体の装飾が変更される時期、第4期 (1698-1715) はいわば衰退期といえることが判明した。

庭園建設の主要な目的は祝宴の開催にあった。1664年5月に行われた「魔法の島の歓楽」と呼ばれる最大の祝宴

ではルイ14世は主催者であり、演劇の主役であった。庭園内は仮設建築物と装飾物であふれていた。この祝宴は王の貴族に対する優位性を誇示し、認証させる場であった。第2期になるとボスケが建設されていくが、ダンス、軽食、音楽会などを目的として豪華に恒久的な装飾が施される。祝宴の日常化であるが、小規模になっている。そして第3期には装飾は簡素化され、庭園は利用の場から見るための場へと変貌する。このような変化は王の権力基盤の強化と密接に絡まっており、祝宴はいわばそのための道具であった。庭園はその内実の変化を反映させながら建設が進められ、改変され続けたのである。

次に宮殿と都市の変化を問題として取り上げる。ヴェルサイユとは1682年には宮廷が移り、フランスの中心地となるなど、庭園、宮殿、都市が一体となって発展した場所だからである。従って庭園の変遷も庭園自体で収斂している問題なのではなく、宮殿や都市を含めたヴェルサイユ全体の変遷の中で捉えて行かねばならない面を持っている。

宮殿は1663年、1668年、1678年に増築をかねて大改造された。狩猟のための小規模な城館がまず台所や厩舎を整備するとともに外観を整えられる。次に長期滞在ができるように諸設備を整えるなど、大幅に増築する。その結果、増築された庭園側、つまり西側の外観は入り口側のデザインとは異なった壮大なものに一新する。最後にはここを宮廷とし、恒常的な住居とするためにさらに増築を重ね、王の一族ばかりでなく貴族まで部屋を持つ大宮殿に変身させた。

その一方で以前あった村落は取り壊され、宮殿の前、つまり東側に都市が計画的に建設されていく。図-2は1675年の都市の図であるが、このようにパット・ドワ (patte d'oie) と呼ばれる3本の幅広い直線道路が宮殿前から広がっている。これらの道路に挟まれた二つに区域は厩舎など主に公共的な建築物の敷地となり、住居などは広がって行く3本の道路の外側に建設された。北側には1671年からヴィル・ヌーヴ (Ville Neuve) と呼ばれる主に市場を中心とする商業の区域が建設されるが、それは図-2で示されている。そこは3分されており、宮殿付近には貴族の館、最も遠い区画には商人の館、その中間には大商人の館という階層性を持って構成されていた。建築の形態も規格化され、区画ごとに統一されていた。また南側には1685年からパルク・オ・セルフ (Parc aux Cerfs) と呼ばれる地区が造成され、グリッドパターンの街路が造られるが、建物は造られずに終わった。このように城壁を持たないという当時としてはまれな都市が建設されていったのである。

以上の宮殿と都市の動きを総合的に捉えるなら、ある一貫した動きが認められる。すなわち王を最高権力とするヒエラルキーが貫徹した世界を創り出そうとする動きである。

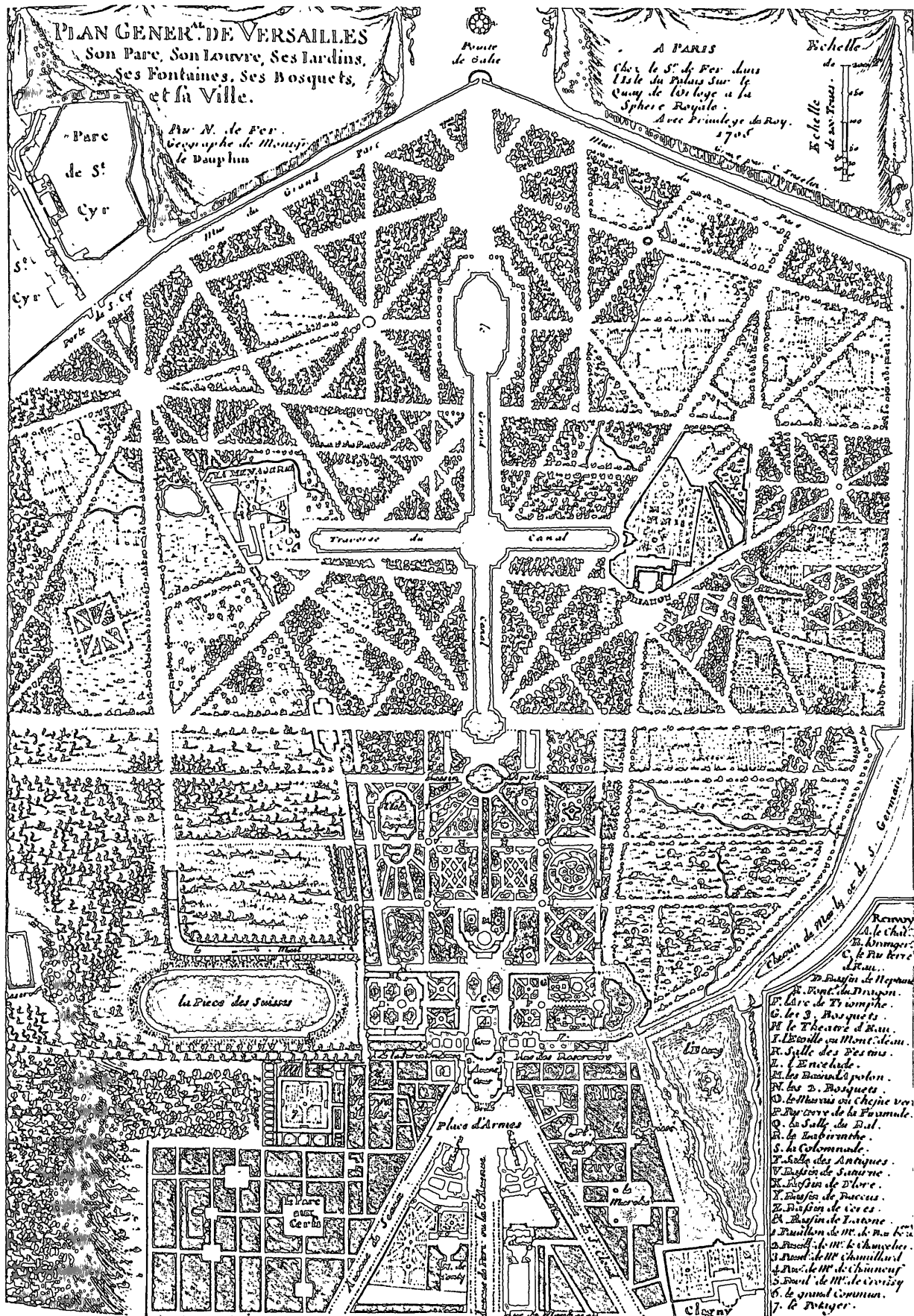


図-1 ヴェルサイユ庭園

庭園を祝宴の場すなわち舞台装置として建設し、祝宴の架空の世界の中でその世界を演出していたのだが、宮殿もそのために外装を整備されている。つぎに長期滞在のための宮殿の拡大と都市建設に伴い、庭園にはボスケを建設するなど祝宴で描かれた世界を恒常化させた。最後にはさらに宮殿と都市を拡大することによりヴェルサイユに宮廷を移転して居を定め、その世界を現実に創り出した。その結果、庭園は見せる場に変貌を遂げたのである。

17世紀における造園の変革を整理すると、次のような点にまとめられる。まず庭園造りの点だが、城館周辺の空間において方形の地割りを行うなど一種の模様を描き込む植栽造りから広大な空間の構成を巡る課題へとその重心を移動したことがあげられる。祝宴の舞台となり、空間の造形を誇示する場となった。その中で失われた「田」の字型の庭園構成は楽園をイメージした始源的形態であったが、庭園はその楽園の世界から地上の権威の世界へと変貌するのである。また同様に庭園の中において何かしら人間には推し量れない闇の世界を表現するような奇怪で無秩序な事

物は姿を消し、人知に基づく合理的な世界が新たに姿を現すのである。

この中で技術的な面でも対応が迫られる。平坦な広大な面積の庭園をレイアウトし、造成する技術である。すなわち測量の技術と、噴水などのための水の技術の発展である。さらに大木を移植するために根土を付けたまま運ぶ技術も発展した。

そして上記の点を総括する点なのだが、庭園を造る上で計画性が強く現れる。計画から建設への作業過程が確立し、それがマニュアル化されるのである。当時出版された庭造りの本がその点を例証している。

次の点是他分野との協力関係があげられる。ヴェルサイユは造園家ル・ノートル、建築家ル・ヴォー (Louis Le Vau, 1612-70)、装飾を担当した画家ル・ブラン (Charles Le Brun, 1619-90) が協力して造り上げた。ル・ブランは庭園内の彫刻を制作し、ル・ヴォーを引き継いだマンサール (Jules Hardouin Mansart, 1646-1708) は庭園内のオランジュリーなどを建設している。総合化が

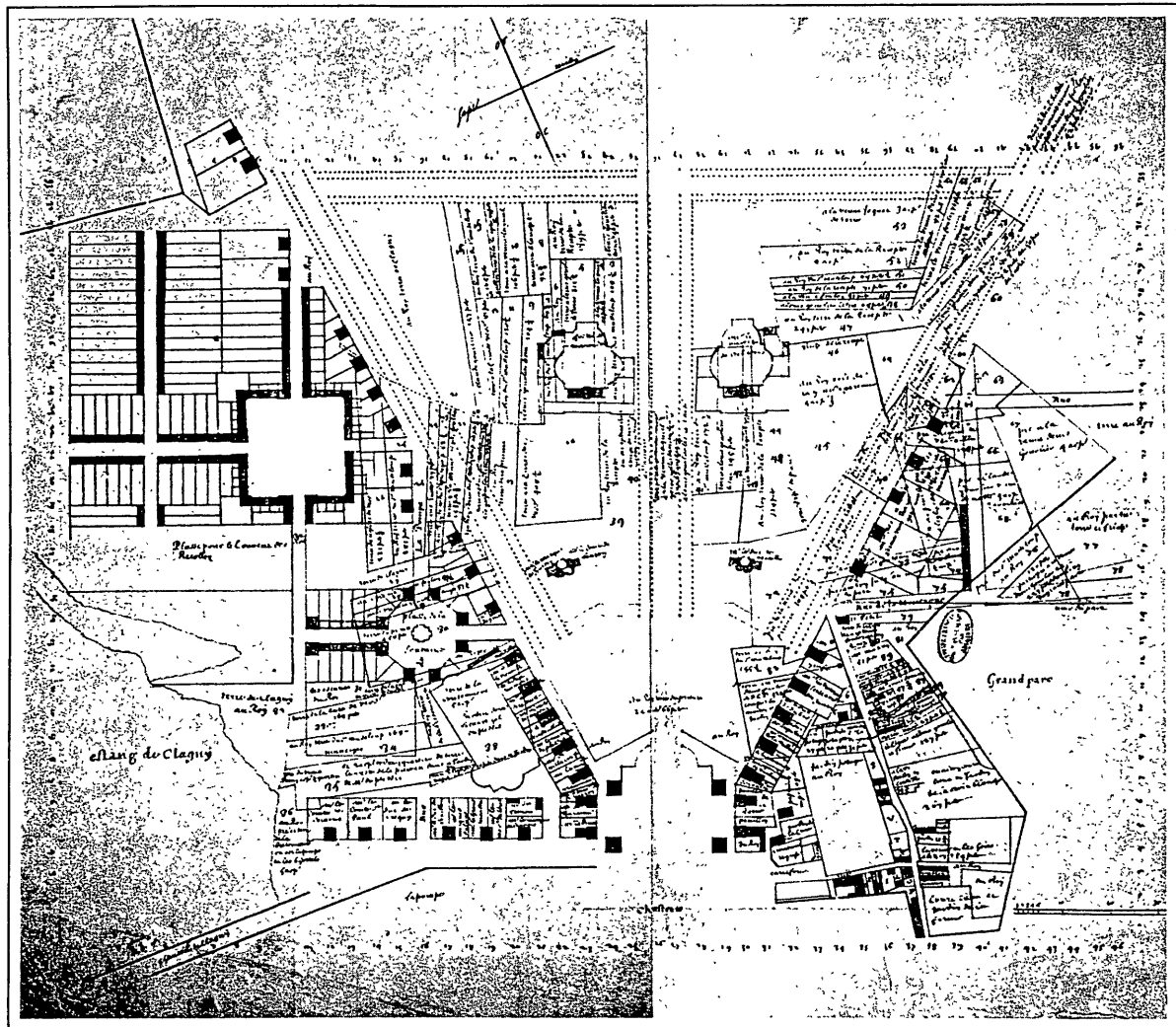


図-2 ヴィル・ヌーヴ

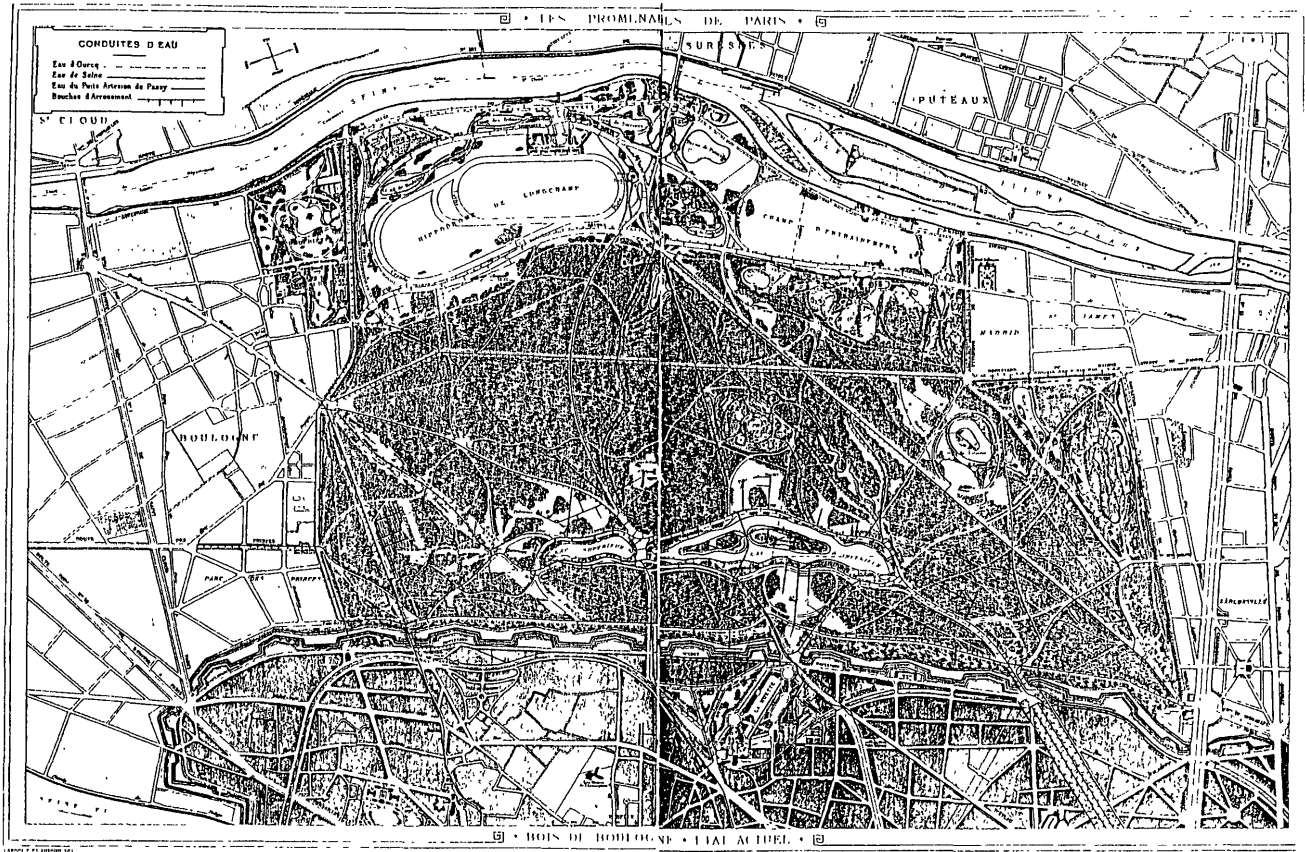


図-3 ブーローニュの森

試みられているといつてよい。造園の変革は他分野との協力関係の中で生まれているのである。またこの点は美術史における変化とも関係してくる。バロックから古典主義、そしてロココへと様式が変わる時期なのだが、庭園においても確かにバロックから古典主義への移行が見受けられるのである。

最後の点だが、ヴェルサイユの都市の設計者は従来建築家のル・ヴォー、あるいはフランソワ・ドルベイ (François d'Orbay, 1634-97) に帰してきた。しかしフランスの都市史研究の第一人者であるピエール・ラヴダン (Pierre Lavedan) 氏はル・ノートルによると推定している。宮殿を中心とする壮大な構成において造園と都市計画がきわめてよく関連し、よく似た構造を持っている点が上げられているのである。

造園のこのように大規模な変革の意義だが、それは造園が持つ社会性の変化にある。庭園は個人的な嗜好の産物から、政治性を帯びた場へと変貌する。また都市計画と同様の構成を持つことにより、社会性が打ち出された。また空間構成、計画と建設などには合理性と普遍性が見受けられるが、それにはデカルトに代表される当時の思想的背景とのつながりを指摘できるのである。そしてそれはルイ14世による絶対王政の確立期という社会経済的背景とも密接

に関係していた。それらのためにフランス式庭園はまずヨーロッパで迎えられ、全世界に広まっていった。このように造園の持つ社会的意義は拡大していったのである。

(2) 19世紀

19世紀中葉に起きた変革は第二帝政期 (1852-70) にパリの都市改造計画の中で行われた。中世の面影が色濃く残る複雑に入り組んだ街路からなる都市を、幅広い直線の道路に白亜の建物が並ぶ近代都市へと変貌させた計画である。その一環として行われた緑地計画により19世紀の変革はもたらされる。皇帝ナポレオン3世 (Napoléon III, 在位1851-70) が指示し、それを受けたセーヌ県知事オスマン (George Eugène Haussmann, 1809-91) が実行するのだが、彼は緑地部門の責任者にアルファン (Adolphe Alphand, 1817-91) を任命する。こうして緑地計画が進められていく。

まず最初に整備され、評価を博したブーローニュの森 (bois de Boulogne) から見ていくと、その図面は図-3である。曲線の園路が馬車用、乗馬用、歩行者用に分けられ、それぞれが森の中を巡るように建設される。小川を森の中に巡らし、池をうがち、滝を造る。高木や低木を植栽し、芝生地を創り出す。カフェやレストランなどの休憩施設を造り、森全体をきらびやかな鉄柵で囲う。以上が森の

改造の主な内容であり、面積は846haにおよんだ。しかもさらに有料のいわば娯楽施設が内部に造られるのである。

その後市内に続々といろいろな緑地が造られていくが、ブローニュの森と同様に風景式のデザインを基調としている。そしてブローニュの森の成功により、そのイメージが緑地全体のイメージとなるのである。

この緑地計画はパリ中に緑地を体系的に配置するものだが、それらの緑地の特徴はまず面積によるカテゴリーがあることがあげられる。広い順に並べると、森 (bois), 公園 (parc), スクワール (square) であり、しかもこれらを並木道が結ぶという、階層性を持った構造を伴っていることである。次の特徴はこれらの配置にある。3段階に分けられた緑地は図-4に示されたようにそれぞれ市内に均等になるように散りばめられている。さらに緑地のデザインがほぼ同様の傾向であることを考慮するなら、この計画は市内のあらゆる区域の均等化を狙っていると言えるのである。

次にそれらの緑地を創出した目的だが、それは第一に劣悪な都市環境の中での衛生の改善にある。当時「都市の肺」と呼ばれていた緑地は下水道網が不備の都市の中で新鮮な空気が吸える場所であった。そして同時に緑地はプロムナードでもあり、緑地計画は散策する場所のネットワーク造りであった。しかし利用する市民の側から見ると緑地は散策を楽しむばかりでなく社交の場でもあり、また娯楽施設的な面を兼ね備えた場なのである。つまり緑地は都市の特別な装置と化したのであり、都市文化の産物となったのである。

この緑地計画の責任者であるアルファンは「プロムナード・ド・パリ」(“Promenades de Paris”)と題された詳細な記録を出版している。この2冊に分かれた大著には59ページにわたる長文の序文がつけられ、そこには彼の造園に対する考え方、造園史とパリの緑地の造園史上の位置づけが記され、さらに新しい庭園が提案されている。その記述を分析した結果、以下のことが判明した。

まず当時の造園をめぐる状況だが、アルファンは造園が社会的におろそかにされていた状況に反発し、造園の社会的な重要性に社会の目を開かせようとした。そのために造園は芸術の一分野であると主張し、証明しようとした。彼は芸術は制作者の思考が反映された創造物であるという定義を下す。芸術を思想的営為の産物と見なし、既存の芸術の枠組みに対して造園の分野を同等に並べようとしたのである。

そして新しいパリの緑地だが、彼に進歩史観的な傾向から見れば造園の歴史上最も進んだ創造物と位置づけられるのであり、しかも芸術に値する作品であると自負していたことが判明する。そして彼のこのような主張は当時の社会において主要な思潮であった科学主義、科学の進歩が明るい未来を約束するというような内容だが、そこから影響を受けていたのである。

パリの都市改造に伴う大規模で体系的な緑地計画の実践は世界でも初めての事業であり、しかもそれは既存の造園界に変化を迫るものであった。その影響は公共緑地にとどまるものではなく、庭園にもおよんでいる。そこでアルファンが提案した新しい庭園を分析した。

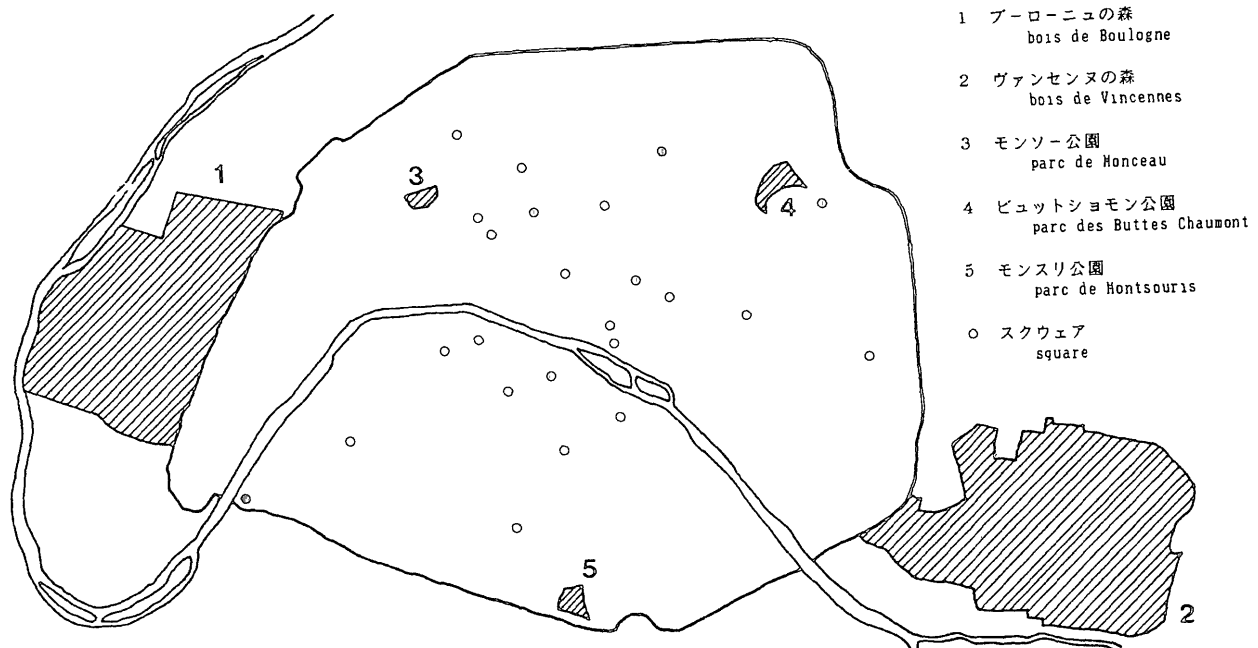


図-4 パリの新しい緑地の配地図

- 1 ブローニュの森
bois de Boulogne
- 2 ヴァンセンヌの森
bois de Vincennes
- 3 モンソー公園
parc de Monceau
- 4 ビュットショモン公園
parc des Buttes Chaumont
- 5 モンスリ公園
parc de Montsouris
- スクウェア
square

整形式庭園と非整形式庭園に分けて説明がなされているが、その全体を捉え、特徴を整理するなら、次の4点にまとめられる。第一に二つの様式を対等に評価する観点が上げられる。つまりその土地の広さと起伏からよりよい効果が得られる様式を選択すべきという考えである。つまりどちらがよいという問題設定はしていない。次に自然らしさへの志向がある。自然樹形を重んじ、刈り込みは身繕いにすぎないと考えている。第三に庭園のデザインは利用を中心として構成されるべきとすることがある。美しさとは人間が歩いているときに見る美しさや実用之美であり、また同時に歩きやすさや実用性をも求めるのである。そして第4に庭園の構成手法の体系化を試み、庭園のそれぞれの様式の長所をより活かす方法を一般化しようとしたのである。

このような新しい庭園、つまり近代的な庭園を一言で簡潔に表現するなら、それは生身の人間が利用することに主体をおいた庭園なのである。19世紀の変革は緑地の組織的体系的な建設にとどまらず、当時の造園界の認識が以上のように大きく変化してきたことにも求められるのである。

19世紀における変革を整理すると、まず造園が対象とする空間として公共緑地が生まれたことが上げられる。この空間には特定の主人は存在せず、無名の市民が誰でも自由に利用できる場所なのであり、この空間の創設は都市にとって市民にとっても画期的なことであった。この点が19世紀の変革の根本をなすものである。

この公共緑地のネットワークは市民にはプロムナードとして把握され、市内を散歩する楽しさ、歩く快楽を基盤としていることを語っている。新たな都市文化の発現であった。

次にそのデザインの変化だが、穏やかで美しく変化に富む自然風景を基調としている。理解するためには一定の教養が必要とされるギリシャ神話や文学作品に題材を取った装飾や小建築物などの事物は捨象され、万人が味わえるよう大衆化されたのである。さらに別の面では人間の視点、歩くときの視線の移動を基礎としたデザインが考えられている。緑地の新しい利用目的にあった新しいデザイン表現であった。

また各方面で体系化がなされていくことがある。緑地の配置もそうだが、造園史における体系化とは二つの様式を相対的に捉える新しい見解などにより造園の世界を新しく構築する試みであった。またよく構成された緑地をデザインするためにその手法を体系化して示そうともしている。

技術的な面においてはアルファンが土木技術者であったこともあり、土木分野の進んだ技術を取り入れている。そして計画から施工にいたる面で、測量をもとに実現可能な計画案を立て、必要な費用を算出し、そして施工するという技術的な作業と社会的な作業の体系化が行われた。パリ市議会に予算案を通さなければならなかったからなのでも

あるが、すなわち近代の社会に合致するように造園の作業も改変を余儀なくされたのである。

この変革の意義は造園が対象とする空間が市民社会における社会的有用性の面からもたらされ、実用的な面から造園が捉えられたことにある。一方で緑地は新しい都市文化の舞台となり、社会的に重要な役割を担うようになる。このような社会性の獲得こそが19世紀の変革の大きな意義であった。

またこの変化は当時の社会の基本的な思潮である合理的実証的思考に基づく科学主義に支えられており、近代という時代にふさわしい形態に変化する近代化であったと言える。これらのことからパリのプロムナードは近代都市の象徴の一つとされ、世界中の都市に広まっていく。

4. 総括

ヴェルサイユ庭園の創造に伴う17世紀の変革、そしてパリ改造計画による19世紀の変革というフランスの造園史における重要な変革を分析し、考察してきたが、その内実はさわめて大きな規模の変化であった。

これらの変革に共通する傾向を捉えるなら、主に二つの面が浮かび上がる。まず都市との関係である。17世紀の場合は都市の新しい形を生み出すためのヴィジョンを庭園が提供し、19世紀の場合は新しい公共緑地が近代都市形成の有力な構成要素となる。両者ともに都市と造園空間の一体性、あるいは類似性が指摘されるばかりか、都市も新しくなると同時に造園の世界も変革され、新しくなっているのである。

次の面は普遍性、合理性、計画性にある。デザインやコンセプト、そして技術の面で顕著である。これらの特徴を獲得したことによりいずれの場合も世界的に注目され、新しい形態を発信しえた。これらのことから判明することは17世紀の変革は19世紀の変革の先駆的な意味を持っていたのであり、近代の先駆けとなり、近代を準備した変革であったことである。このようにこれらの点は造園史の奥底を流れる潮流を形づくっていたのである。

5. おわりに

以上のように論文をまとめ、一区切りとしたのだが、改めて読み直すと、本論文はフランス造園史を通史として取り扱うための基本的な特徴を探究したといった性格が強いことに気づかされる。書いているときは楽しかったのだが、実は結構わからないこともあり、触れずじまいになっている点もある。それらの点は今後の研究の課題としていきたい。また一方で、研究のきっかけとなった初めてヴェルサイユ庭園にいったときの衝撃を考えると、本論文は基礎的な第一歩にすぎず、これからまだまだ研究を深めていかなければならないと思わずにはいられない。

最後に本論文を書くにあたって多くの先生にお世話になったが、特に二人の先生にお世話になった。京都造形大学の中村一先生にはこの論文全体にわたってご指導していただいた。そして信州大学の伊藤精悟先生には様々な助言をしていただいたと同時に、この論文のためになるべく多くの時間が使えるように配慮していただいた。またさらに、研究を始めたばかりの時のことだが、故岡崎文彬先生には資料の取り扱いの厳格さを教えていただいた。ここで改めて深く感謝いたします。

主要参考文献

A. 17世紀

- 1) Antoine-Joseph Dezallier d'Argenville (1709, ただし増補第4版は1747) : La théorie et la pratique du jardinage. Chez Pierre-Jean Mariette
- 2) Simone Hoog (1982) : Louis XIV, Manière de montrer les jardins de Versailles. Édition du la Réunion des Musées Nationaux
- 3) Pierre Verlet (1961) : Versailles. Librairie Arthème Fayard
- 4) François Gebelin (1965) : Versailles. Édition Alpina
- 5) Alfred et Jeanne Marie (1970) : Versailles au temps de Louis XIV. vol.3. Imprimerie Nationale
- 6) Alfred et Jeanne Marie (1972) : Mansart à Versailles. vol.2 Édition Jacques Fréal
- 7) Jean Castex, Patrick Cèreste et Philippe Panerai (1980) : Lecture d'une ville Versailles. Édition du Moniteur
- 8) Ernest De Ganay (1962) : Audré Le Nostre. Éditions Vincent, Fréal & Cie
- 9) Bernart Jeannel (1985) : Le Nôtre. Fernand Hazan

- 10) Philippe Beaussant (1981) : Versailles Opéra. Édition Gallimard
 - 11) Jean-Marie Apostoriadès (1981) : Le roi-machine. Éditions de Minuit
 - 12) Pierre Francastel (1930) : La sculpture de Versailles. Éditions Albert Morancé
 - 13) Jacques Levron (1965) : La vie quotidienne à la cour de Versailles aux XVII^e et XVIII^e siècles. Librairie Hachette
- ##### B. 19世紀
- 1) Adolphe Alphand (1867-73) : Les promenades de Paris. J.Rothschild
 - 2) George Eugène Haussmann (1890) : Mémoire du baron Haussmann
 - 3) Lois Réau, Pierre Lavedan, Renée Plouin, Jeanne Hugueney, et Robert Auzelle (1953) : L'oeuvre du baron Haussmann. Presse Universitaire de Paris
 - 4) David Pinkney (1958) : Napoléon III and Rebuilding of Paris. Princeton University Press
 - 5) Howard Saalman (1971) : Haussmann. George Braziller
 - 6) Françoise Choay (1975) : Haussmann et le système des espaces verts parisiens. In Revue de l'Art, n.20, pp.83-99
 - 7) Françoise Choay (1965) : The Modern City. George Braziller
 - 8) Leonardo Benevolo (1973 - 79) : Storia dell'architettura moderna. Gius Laterza & Figli S.p.A.
 - 9) Pierre Guiral (1984) : La vie quotidienne en France à l'âge d'or du capitalisme 1852 - 79. Librairie-Hachette
 - 10) 喜安朗 (1982) : パリの聖月曜日。平凡社
 - 11) 阿部良雄他 (1989) : 講座 20世紀の芸術 I. 岩波書店

Summary : This study aims to reveal the characteristics of two turning points in landscape architecture's history in France : 17th century when the french garden style was formed, and 19th century when the system of green spaces was created in the rebuilding of Paris.

After analyzing the characteristics of the reform in the landscape architecture in 17th century, the essential points are follows. The garden's design changed the pattern of a rectangle divided by the cross into the composition for enormous space. With this change, the techniques of surveying and the use of water for fountains etc. developed. The cooperation with other fields became important. And, finally, landscape architecture was related to city planning. They used the same composition.

In 19th century, the first point is the birth of public open space in the city, which became a subject in the landscape architecture. Its design was based on the peaceful and beautiful scenery of the country. Its element needing knowledge to be understood was cleared from this open space. And next, the systematization in some sides : arrangement of open spaces, history of landscape architecture, method of composition, and process of construction.

If I grasp the common trend in these two reforms, two points are revealed. One is the relation with the city, and the other is the characteristics of generality, rationality and planning. And it Became clear also that the reform of 17th century is forerunner of modern age and that it prepared the reform of 19th century.